

の民話ミュージカルが成功して、松尾紘教育長と友田さんとわたしの酒席で、松尾教育長が「継続しませんか」と提案された。よっぽど、わたしが寂しうにしていたのかもしれない。友田さんも「おお」と膝を打った。

わたしは松浦生まれではありませんから」。松尾教育長も人生の寂しさを知る一人であった。わたしは今福にも上志佐にもよく遊びに行った。隣町の調川には中学時代にはよく野球の試合に行った。ホームランを打った感触はまだこの手に残って

「鬼平犯科帳」の鬼の長谷川平蔵も、若いころに遊びほうけた経験が盗賊を取り締まるのに役に立っている。表社会と裏社会、土地勘と人間関係である。政治は二つがあればいいという。国民を飢えさせないことと戦争をしないことである。遊び

ない。先生ならば、えこひいきをする先生になっている。わたしは好き嫌いが激しい。医者などはとんでもない。「酔いどれ天使」よりひどい飲んべえ医者になっていたはずである。お坊さんならば、お経も読めぬ生臭坊主である。自由業でよかつた。

# 人生にまよひかあり

いまは友田吉泰さんも県議会議員である。おとなしいが骨がある。「人生には、登り坂、下り坂、まさかの三つの坂がある」「ええ、まさかだけは予測ができません」。そんな話をして酒を酌み交わす。政治の話はまったくしない。わたしの松浦の後援会長でもある。佐賀県の生まれだそうだが、頷ける。

今福小学校から始めて、星鹿小学校が取り敢えずのトリと決まった。星鹿小学校をラストにしたのも松尾教育長らしい心配りであった。しかし、まだ完全燃焼していないらしく、心残りではある。「もう、ひと巡りしなければ」が本音である。「わ

いる。青春時代の感触は生涯残るものらしい。「昨日のことは忘れたが、昔のことはよく覚えている」とだれもがいう。遊び回ったおかげで民話ミュージカルが書ける。ある時期、遊びほうけるのはいいのかもしれない。

ほうけたことのある政治家の話は面白い。飢えと喧嘩を知っている。わたしは、政治にまったく興味もなかった。父は「学校の先生か医者かお寺のお坊さんになれ」と口すっぱくいつていた。どの職業もわたしには向いてい

もつとも、自由ほど不自由なものはない。悠々と自由に泳いでいるように見える水鳥も、足の水かきはもがいている。朝昼晩、舞台や映画の本のことで頭はいっぱいである。隠居を考えながら次の作品を考えている。因果である。いま、政治には興味いっぱいである。決して、立候補するわけではない。